



岡山県・総社と広島県・神辺を結ぶ 41.7km
田園風景の中をゆったり走る高規格ローカル鉄道



旧山陽道に沿って走る井原鉄道は、1999（平成 11）年 1 月 11 日に開業。
着工から 33 年の歳月を経て開業した、“20 世紀最後の鉄道”だ。
沿線には自然豊かな景色や歴史を感じる宿場町、特産品がいっぱい。
観光路線や地域の足としての役割を担いながら、
今日もどこかで誰かの笑顔を運んでいる。

文・写真：伊原 薫

井原鉄道株式会社

- 設立 1986（昭和 61）年
- 営業路線 総社・神辺（41.7km）
- <https://www.ibara-railway.co.jp/>



①井原駅。待合室の椅子は列車から取り外したものを使用している ②井原市特産のデニムを扱うジーンズショップなどもある ③待合室は矢じりをイメージしたユニークな外観



最後尾の車窓から見た高梁川橋りょう。堤防に「小田川切り替え R5 完成予定」の文字が描かれている



最後部の車窓から見た風景。取材時、沿線はちょうど田植えの真っ最中だった



早雲の里荏原・井原間の小田川橋りょうを渡る列車

水田の中を高梁線が続く

桃太郎伝説ゆかりの地として知られる岡山県総社市。その中心部、総社駅を起点とする第三セクター鉄道が、井原鉄道だ。3つあるホームのうち、東側の2つはJRが使用している。最も西側のホームで待つことしばし、折り返し神辺行きとなる列車がやってきた。

学生や通勤客と入れ替わるように乗車すると、ほどなく出発。ここから清音までの1駅は、JRの線路を借りる形で井原鉄道も営業を行っている。乗り入れではない

ため、運賃は井原鉄道の通算となり、JRの初乗り運賃がかからない。利用者にとってはありがたい仕組みだ。

清音駅を出た先でJR 伯備線と分かれると、列車はすぐ西へ大きくカーブしながら高梁川を渡り、真備地区へ。沿線は水田が広がる典型的なローカル線の風景だが、線路は高架構造となっている。

この辺りは2018年7月の西日本豪雨で、大きな被害を受けた。「地上部分にある信号機器などが水に浸かり、一部区間の運休を余儀なくされました」と、井原鉄道の鳥越 肇営業企画課長が教えてくれ

井原鉄道路線図



鉄道・運輸機構（旧日本鉄道建設公団）が建設した井原線

岡山県総社市から広島県福山市神辺町に至る総延長約42kmの井原線は、日本鉄道建設公団（現鉄道・運輸機構）により1966（昭和41）年7月に国鉄新線として工事着手され、その後、国鉄再建法施行による工事休止を経て、1998（平成10）年12月に完成しました。

同区間には高梁川橋りょうをはじめとする269カ所の橋りょう（延長2万3,882m）と妹山トンネルなど7カ所のトンネル（延長3,243m）が建設されました。



1998年6月に行われたレール締結式



高梁川橋りょうを渡る列車



列車の最後部から見た車両基地



清音駅の南側。左右がJR 伯備線とその間を井原鉄道が走る



川辺宿駅に停車中の列車



橋脚の一部には地元の学生によって絵が描かれている

た。一時は復旧まで半年ほどかかると言われていたが、多くの人々の協力を得て、約2カ月で全面復旧。「沿線の人々が、列車を見て『復興のシンボル』と言ってくれたことが印象に残っています」。記憶が風化しないよう、高架橋のところどころには水害時の浸水ラインが記されていた。

☀ 利用者は回復基調もコロナ禍で苦境に

宿場町の街並みが残る矢掛を経由し、総社駅から40分ほどで井原駅に到着。矢掛から井原、そして神辺へは、かつて井笠鉄道という軽便鉄道が走っており、井原は2路線が集まるターミナル駅だった。

今も高校や病院、行政機関があり、人通りは決して少なくない。

「ただ、高校の統廃合や自家用車へのシフト、沿線人口の減少などで、2000年代後半には利用者が減少しつつありました。そこで、関西や首都圏からの観光客誘致に力を入れました。幸い、近くには倉敷美観地区や鞆の浦といった有名観光地がありますので、これらと合わせて井原鉄道を利用してもらうパッケージツアーの提案も行っています。2005年に導入した『夢やすらぎ号』も、強力な集客ツールとなりました」

さまざまな策が功を奏し、利用者数は



「井原マイレールプラザ」会長 清水 明人氏



会員による沿線案内

駅舎や売店の管理、「井原線 DE 得得市」や沿線案内などで地元を盛り上げています。

井原鉄道が開業する際、青年会議所の一員として車両の仕様決定に携わったのが最初の縁だという清水さん。18年前から「井原マイレールプラザ」会長として、井原駅の管理を担っている。「2009年からは『井原線 DE 得得市』を開催しています。買い物をすれば帰りの運賃が無料になるという仕組みで、街と鉄道、双方の活性化につなげています」

現在は、雛飾りや鯉のぼり、七夕の笹飾りなど季節に応じた飾りつけも実施。鉄道利用者だけでなく、駅に来ることが目的という人も増えたという。

「井原鉄道は、地域にとって念願の路線でした。鉄道があることで仕事や学校の選択肢が増え、また鉄道を応援することが井原市の活性化にもつながると考えています。鉄道に接し、乗るさつ



2022年6月に行われた井原線 DE 得得市 (写真提供: 井原市農林課)

かけを作ることで、『実はかなり便利なんだ』ということに多くの人が気付いてくれることを願っています」

高架路線という特性を生かし、「列車からサクラやヒマワリなどを楽しめる景色を作りたい」とも語る。サポーターの豊富なアイデアと行動力が、これからも井原鉄道の支えとなるに違いない。

江戸時代の風情ある街並みがそのまま残る「矢掛宿」



街並みのほぼ中央には江戸時代に本陣を務めた石井家が、東方には脇本陣であった高草家の建物が残る。電線は地中化されており、景観は良好。2020年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された

旧山陽道の宿場町として栄えた矢掛。駅南側に本陣や脇本陣などが残っており、見学だけでなく宿泊できる施設もあります。2021年には、「夢やすらぎ号」と同じく水戸岡鋭治氏がデザインを手掛けた「道の駅山陽道やかげ宿」もオープン。風情ある街並みに新たな魅力が加わりました。



道の駅山陽道やかげ宿



2010年度の96万人を底として回復。15年度には開業以来最多の115万人を記録し、以降も順調に推移した。だが、前述の西日本豪雨で打撃を受け、まだ回復途上だった20年にはコロナ禍という新たな試練が降りかかった。21年度はわずかに持ち直したものの、危機的状況であることに変わりはない。

多彩なアイデアで“攻め”を貫く

そんな中であって、井原鉄道は今も“攻め”の姿勢を貫いている。「2021年には同じく苦境に立たされていた大原美術館と連携した『アート列車』を、翌22年にはバス会社を巻き込んだ『スタートレイン』をデビューさせました。前者は美術館との回遊型観光を狙っており、改装費用はクラウドファンディングで募ったのですが、目標をはるかに上回るご支援をいただきました。また、後者は地元バス会社の協力を得て同じコンセプトの観光バスを用意す

るなど、旅行会社がツアーに組み込みやすくなる工夫を凝らしています」

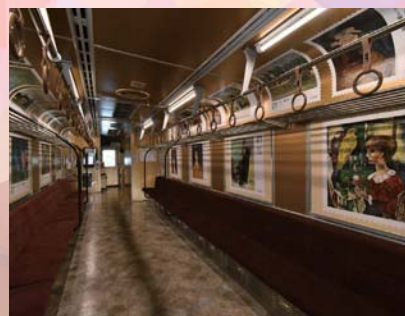
直近では、しまなみ海道や吉備路自転車道を訪れるサイクリストに立ち寄ってもらべく、サイクリングコースを設定。列車に自転車を積み込むためのスタンドや輪行袋を無料貸し出ししている。

「自助努力では回避できない危機ではありますが、それでも歩みを止めるわけにはいきません。地域の足を残すため、常にアンテナを張って地域の方々や観光客のニーズをつかみ、前に進んでいきたいと考えています」

井原駅では特産品のデニム商品を取り扱うショップに加え、井原鉄道自らが酒類販売免許を取得し、駅窓口で地酒を販売。地元の偉人・那須与一の話にあやかった「合格祈願ガチャ」も人気だという。

社員と地元サポーターの生み出すさまざまなアイデアが、今日も訪れた人たちを笑顔にさせている。

世界的アートを楽しめる「アート列車」



公益財団法人大原美術館とタイアップし、2021年にデビューした特別車両。車内外には大原美術館が所蔵する43作品54点の絵画が、切手のようにあしらわれています。その姿は、世界的な芸術作品が列車に乗って街に飛び出したかのように。列車に乗りながらじっくり鑑賞したり、まるで絵画が高架橋を走っているような姿を楽しんだりできます。ユニークな列車を楽しんだ後は、ぜひ美術館で本物を眺めてみては？



「天文王国おかやま」の魅力をもった特別車両「スタートレイン」

「天文王国おかやま」にちなみ、星空をテーマにした鉄道旅を楽しめるよう、12星座や地域の観光素材を車両内外にフルラッピングで表現。



特別車両「夢やすらぎ号」

居間やティールームのような心やすらぐ「部屋」をイメージしたデザイン。ブラインドやベンチ、床などには木材が使われ、外観は夕焼けや小焼を象徴する茜色とされた。

